

第 16 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える[9]）

進路指導と受験生心理 - 大学選びのメカニズムを探る -

補足ノート

大学入試の多様化と進路選択・進路指導、受験生心理について

- * 「努力すれば結果となって現れる」というのは「努力した分だけの結果が得られる」という意味であって、結果を単純に「成功」「達成」(つまり入試合格)と置き換えることは出来ない。すなわち、努力をした者が必ず成功(合格)するとは限らないが、成功(合格)したものは必ず努力している。
- * 大学受験の場合、この種の誤解が戦前から脈々とあり、現在でも合格者(学生)に「私と大学受験」という題の作文を書かせると、殆どの学生が「努力の重要性」を訴えてくる。その努力が「適正であったかどうか」は「結果(合否)」でのみ判断することになる為、フィードバックの余地が無く、いつの世も受験生は「必要と思われることは何でもやる」という姿勢をとらざるを得ない。
- * このため、近年の高校では「高校生ではなく受験生になろう！」等のキャンペーンの下、大学受験をクラスや学年の「団体戦」として位置づけ、進路指導に熱を入れている。受験生自身は、「同級生はライバル」という意識もあり、必ずしも団体戦と受け止めてはいないようであるが、高校側の仕掛けにより「気持ちの盛り上がり(ウォーミング・アップ)」があり、実際に3年次秋から冬にかけて学力が大きく伸びる傾向にある。
- * 受験指導による受験生の気持ちの盛り上がりは、大学入学後に徐々に平静に戻ってゆく(クーリング・ダウン)。ウォーミング・アップが高校側によって組織的になされたのに対し、クーリング・ダウンは学生個人に任されている。受験指導による「加熱」が大きいほど、一人で「冷却」しなくてはならない学生の戸惑いも大きいのではないか。
- * 受験指導は、生徒の学力から合否の「読み」がしやすい、いわゆる一般入試向けが主力となる。AOや推薦入試は、合格の基準が判り難いとされ、忌避される。大学側の思惑の一つである、生徒の潜在能力を測る尺度の多元化が、現場ではあまり理解されず、裏目に出ている。
- * 「大学へのつなぎ」の指導が高校教員の都合で左右されている感があったので、質問のコーナーで「高校は、何のために受験指導をしているのか？」と尋ねた。高校教員からの回答は、やはり「入試合格」が至上命題との事で、学力向上に裏づけされるような教育的な連携はあまり意識していないようであった。